

陸上運動系領域の教材づくり・授業づくりの考え方・進め方

講師 信州大学 教授 岩田 靖 氏

1 次期学習指導要領改訂のポイント

「わかる・できる・かかわる」ことが密接に結びつく「もっと楽しい」体育

→ 運動領域に合わせて } ⇒さらに深めること
教科をこえて }

*運動・スポーツの形式を表面的になぞっているだけではないか・・・ ⇒脱却を！
何の手だてもなしに子どもに丸投げになっていなか・・・
*学習目標、内容の明確な授業づくりのもと、子ども達の積極的な学習参加を促す
*わかり合う、支え合う学習集団の必要性
子ども達の豊かなコミュニケーション

○年齢が上がるにつれて体育離れが見られる。(中1ギャップ)

難しい活動が多く、あきらめる。体育の授業で体育嫌い、運動嫌いになってしまう。

×苦手だからしょうがない、わかりようがないと子どもが感じてしまう。

×できない原因を子どものせいにする。

↓

自己の指導内容や方法に問題点を見出す努力が必要…教師の専門性の原点

運動ってたのしい！友だちと体を動かすともっとたのしい！ が「心と体の一体化」のベースである。

2 陸上運動・・・現時点での子どもの能力が大きく影響

記録にある二面性 ◎伸びや達成感を実感できる。

△持っている能力を序列する。

↓

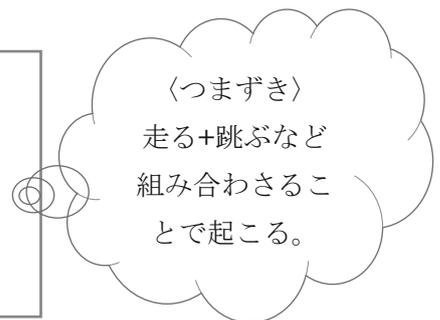
苦手な子が「苦手」を再認識してしまう。

そうではなく、肯定的に取り組める工夫をすることが必要である。

運動の苦手な子への配慮を大切にする。

陸上運動の授業における視点

- ①すべての子ども達が運動の楽しさを感じる
- ②集団での活動→達成を意図的に入れる
- ③できない・苦手な子を直視し、そこから課題や技術を問い直す
- ④「わかる」を大切に



①すべての子ども達に達成の喜びを味わわす～統一と分化の原理を生かす～

「統一」とは、子どもに合わせて分けるのではなく、学ぶことは一緒であるということ

「分化」とは、それぞれの能力に合わせてめあてを分ける（目標）こと

ex) 【2サークル・リレー】 実は“リレー”と聞くと“嫌だ”と思う人が多い。

①苦手な子へ配慮②バトンゾーンの難しさの解決③勝敗の決定のスリリングさ

☆w・u p → まっすぐ走る → バトンパス → リレー

(ももあげ・スキップ) (8秒間走・スタート位置を変えて) (打ち合わせ・円じん)

ex) 8秒間走、ねらい幅跳び、折り返し持久走、ハードル走(50m走とのタイム差)

*子どもがどこを目指せばよいか考える基準を示すことで、学習内容を焦点化させ、技術学習の必然性を浮かび上がらせることができる。

②集団的目標達成に目を向ける～個人的運動の集団化を取り入れる～

「記録」の「集団的達成」を導く工夫により、「かかわり」を増幅させる。

ex) ハードル走のタイム差をチーム戦で

*ただ集団をつくるのではなく、学び合うねらいや目的をはっきりとさせることが大切である。

③子どものつまずきを直視し、本質的な運動の課題・技術を問い直す。

*子ども達の運動学習の質を高めていく、意味のある運動課題への取り組み、チャレンジが重要になる。

最も中心となる運動技術を問い直す。学習内容 教材の構成

ex) 走り幅跳び・走り高跳び・ハードル…走る+跳ぶ の組み合わせ

↑どこから跳べばいいの? ↑跳んでからまた走るむずかしさ。

着地を起点にしたリズムにするとよい。



技能の向上を保障しうる教材、教具の提供が必要である。

④「できる」ことに向けての「わかる」ことを大切にする。

3 「走」「跳」の運動だけでなく、「投」の運動を大切にする。

外部から観察できる運動経過の観点からではなく、全体的な「力動性」や「弛緩と緊張」の関係から子どもの動きの感覚的世界を解釈してみる。

*詳しくは午後からの実技研修で行う

陸上における学習課題

- ① 「跳ねる」ことが苦手な子どもが少なくない。
- ② 「リズム」に合わせて動きをコントロールができない。
- ③ 力感のコントロール（力を入れたり抜いたり）ができない。

「跳ねることのできる体づくり」がキーワード

- ① 「走」と「跳」の運動を組み合わせる。
- ② 走って跳ぶ、跳ぶことの連続という動きの中での運動の先取りをする。
次の動きを予測しながら動く。ex) ケンパ
- ③ 跳躍を含んだリズムや力感のコントロールをする。
体が緊張しっぱなしでなく、力を入れたり抜いたりする。

*特に、低学年のうちから「走・跳の運動遊び」として取り組んでいく必要があるだろう。

記録 大山西小学校 松本 陽香
明倫小学校 好川 美香